

漢語上古音の-r-介音(2)
—李方桂氏のr介音説—

吉池孝一 中村雅之

l介音とr介音

吉池：前回の「漢語上古音の-r-介音(1)」では、Jaxontov氏の1960年の論文によるならば上古音に二重子音Cl-を認めざるをえないということでした。

中村：Jaxontov氏は、藍l-mと監k-mなどの諧声系列によって造字時代に二重子音kl-などを認めるということだけでなく、そこに声母と諧声系列の一定の分布があることを見出し、二重子音Cl-を想定したわけですね。その一定の分布というのは概略二つあって、一つは①2等韻(中古音の枠組み)に来母(l-)字が極めて少ないということでした。もう一つは②来母(l-)字は2,3,4等韻の字と諧声系列をなすが1等韻の字とは諧声系列をなさないのが原則ということでした。

吉池：2等韻字は、かつてすべてCl-のような二重子音であり、その後-lが落ちて、中古音ではC-となった。かつてのCl-では、ll-のような同質の子音連続が認められなかったため、-lが落ちてl-という声母ができることはなかった。これが①2等韻に来母(l-)字が極めて少ない理由ということでした。それに対して、1等韻には-lが落ちてC-となるようなCl-は一つもなかったため、来母(l-)と諧声系列をなすことはなかった。これが②来母(l-)字は1等韻の字とは諧声系列をなさない理由ということでした。1等韻と2等韻はCl-の存否において互いに補い合っていたわけですね。①と②には少数の例外があるのですが、それは後代のものとして説明することができるのでJaxontov氏は主張しています。今回は二等韻のCl-を中心にして、Cr-との関連について、議論がどのように展開したかを確認しましょう。

中村：何を根拠として-lを-rに変えたのか、-rに変えるとどのような利点があるのかということを確認するということですね。前回、*-r-介音についてBaxter(1992:262)¹の記述をみましたが、もう一度出してもらえますか。

吉池：*-r-介音についてBaxter(1992:262)にはつぎのようにありました。

The essentials of the theory of division-II syllables outlined above, which we may call the *-r-hypothesis, originate with Jaxontov's proposal to reconstruct *-l- in division-II (1960a). This

¹ Baxter, W. H. (1992) *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

proposal was adopted by Pulleyblank, who reports having independently arrived at the same idea (1962:110). Later Pulleyblank substituted *-r- for his earlier *-l-, as I do. Li Fang-kuei also reconstructed *-r- in division-II syllables. Jaxontov's original proposal was based on the fact that (1) the contrast between division-II vowels and other vowels does not appear after Middle Chinese initial *l-* (apart from a few irregular forms), and (2) many division-II words appear in *xiéshēng* series with words in Middle Chinese initial *l-*. (Recall that in my system MC initial *l-* reflects OC *C-r-.) Reconstructing *-r- in division-II finals provides a unified explanation of these phenomena. It is also significant, of course, that the Middle Chinese retroflex initials *TSr-* and *Tr-*, whose retroflexion I attribute to medial *-r-, are regularly placed in division-II of the rhyme tables, while plain *TS-* and *T-* are not. (*Tr-* occurs in division-III as well.)

中村：この記述によると、Pulleyblank 氏は²、Jaxontov 氏とは別に同じ結論に達していたようです。2等韻に r 介音を想定した研究としては李方桂氏を紹介しています。

吉池：Pulleyblank 氏も後に *-l-* を *-r-* に変更したとありますが、その点もふくめて、経緯を確認しましょう。まず李方桂(1971;1982)³の r 介音からはじめましょう。

李方桂氏の r 介音説

李方桂氏は、2等韻に介音の *-r-* があつたならば、上古音の舌音 (*t-* など) と齒音 (*ts-* など) が、中古音の 2等韻でそり舌音 (retroflex) の *t-* (*[t]*) や *ts-* (*[tʂ]*) になることをうまく説明できると考えたようです。

中古的知 *t-*、徹 *th-*、澄 *d-*、娘 *ŋ-*、照 *tʂ-*、穿 *tʂh-*、牀 *dz-*、審 *ʂ-* 等捲舌聲母、在二等韻母の前、一般人都以為是受二等韻母的元音的影響，從舌尖音變來的。但是這些聲母也在三等韻母前出現。三等韻母是有介音 *j* 的，他只應當顎化前面的聲母，不應當捲舌化。此外如果我們承認二等韻母在上古時期另有一套元音與一等韻的元音有分別，那麼上古的元音系統要變的十分複雜，要有長短、鬆緊之分，並且得承認長短、鬆緊以及其他不同的元音都可以在上古時期裏常常押韻。這顯然不是一個適當的解決的辦法，因此我想這些聲母後面一定另有一套介音可以使他捲舌化，前面我們已經擬一個 **r-* 聲母，這個 **r-* 正可以當作這些聲母後的介音，所以我們可以有以下演變。

上古 **tr-*, **thr-*, **dr-*, **nr-* > 中古知 *t-*、徹 *th-*、澄 *d-*、娘 *ŋ-*。

上古 **tsr-*, **tshr-*, **dzr-*, **sr-* > 中古照 *tʂ-*、穿 *tʂh-*、牀 *dz-*、審 *ʂ-*。 (15 頁)

² Pulleyblank, E.G.(1962) The Consonantal System of Old Chinese, *Asia Major*, New Series 9 (1), pp.58-144. 9 (2), pp. 206-265.

³ 李方桂(1971)「上古音研究」『清華學報』新第 9 卷第 1—2 期合刊。『上古音研究』商務印書館，第 1 版 1980 年，第 2 次印刷 1982 年がある。この対談は 1982 年による。なお、李方桂(1971)と李方桂(1982)では異なる部分 (論文の添付) があるので、李方桂(1971)とのみ記す場合がある。

中村：段の最後に、介音の-rを設定する前に声母の rを設定したとありますが、これはどう
いうことでしょうか。

吉池：喻母 4 等に rを設定したということです。

他の *d- は中古時代の喻母四等，他把喻母四等分爲兩類，一類是從上古 *d- 來的，一類是從上古 *z- 來的，這種分法的困難，董同龢已經分辨清楚（上古音韻表稿，18-20 頁）。大體上看來，我暫認喻母四等是上古時代的舌尖前音，因爲他常跟舌尖前塞音互諧。如果我們看這類字很古的借字或譯音，也許可以得到一點線索。古代台語 Tai Language (Li, 1945, 340 頁) 用 *r- 來代替酉 jiǒu 字的聲母，漢代用烏弋山離去譯 Alexandria 就是說用弋 jiək 去譯第二音節 lek, 因此可以推測喻母四等很近 r 或者 l。又因爲他常跟舌尖塞音諧聲，所以也可以說很近 d-。我們可以想像這個音應當很近似英文（美文也許更對點兒）ladder 或者 latter 中間的舌尖閃音（flapped d, 拼寫爲 -dd- 或 -tt- 的），可以暫時以 r 來代表他，如弋 *rək, 余 *rag 等。到了中古時代 *r 就變成 ji- 了，參考古緬甸語的 r- 變成近代的 j- 的例子。喻母四等還有跟唇音或舌根音互諧的例子，如婁（參看篋）鹽（參看監）等，這類的字可以擬作 *brj- 或 *grj-。（13-14 頁）

中村：介音の-rは理論的な産物であるが、喻母 4 等に当てる声母の rには実例があるということですね。喻母 4 等には、漢語から借用されたタイ語の語形に rがあり、ギリシア語に対応する漢代の音訳語に lがある。また諧声系列によると dがある。

吉池：喻母 4 等が r-, l-, d- である可能性をあげながら、とりあえず rとするわけですが、その根拠は明瞭ではありません。

中村：喻母 4 等をめぐっては検討すべきことは少なくないのですがそれは別の機会にすることとして、-lを-rしたのはなぜか、それは適当であるかという本題にもどりましょう。

中古 2,3 等舌音「知徹澄娘」はそり舌音 (retroflex) か

中村：李方桂氏が r 介音を想定した直接の理由は中古音の 2 等齒音と 2,3 等の舌音がそり舌音 (retroflex) であるという前提によります。このそり舌の声母ですが、Karlgren(1915-26)⁴は 2 等齒音をそり舌音とし、2,3 等舌音のほうは舌面音とした。その後、羅常培(1931)によって 2,3 等の舌音（知母、徹母、澄母、娘母の各声母で、一括して舌上音と称する）をそり舌音

⁴ Karlgren, B. (1915-26) *Études sur la phonologie chinoise*. Leyde, Stockholm. 漢訳本 趙元任 羅常培 李方桂合譯 (1940) 『中國音韻學研究』北京：商務印書館。2003 年第 2 次印刷版による。

とする説が提示されれば定説のようになっていきます。これを受けて藤堂明保(1957)⁵や李方桂(1971)が-rを設定することになります。大島正二(1972)⁶も r 介音を設定しますが、前二者とは設定の理由がやや異なるようです。

吉池：そうですね。上古の t-, ts- などから中古音のそり舌声母の t-, ts- などへの変化を、そり舌成分として-rを想定することによって説明するわけですが、早くは藤堂明保(1957)があり、ついで李方桂(1971)ということになります。なお李方桂(1982)によると、1968年に台湾大学で上古音の講義を6回していることがわかります。また、当該書には1970年の香港中文大学での講演要旨が添付されておりそれには r 介音に言及した部分があるので、李方桂(1971)以前から氏の r 介音説は知られていたはずです。

ついで大島正二(1972)ということになります。大島正二(1972)には「介母として*rを選んだのは李方桂教授の示唆、藤堂明保博士の所論（前引書 p.308 など）に啓発される点のあったことによる。」（76頁の注）とあります⁷。「李方桂教授の示唆」が何をさすか明瞭ではありませんが、李方桂(1971)以前の口頭によるものか講義資料・講演資料を指すのでしょうか。なお大島正二(1972)は、中古2,3等の舌上音（知徹澄娘）をそり舌音（retroflex）とも硬口蓋音（palatal）とも定めておらず、*tr-等からそり舌音もしくは硬口蓋音が生ずるとします。r介音の設定の主な目的は上古音の主母音の体系の単純化にあるようにみえます⁸。

⁵ 藤堂明保(1957)『中国語音韻論』東京：江南書院。

⁶ 大島正二(1972)「上古漢語の一・二等韻について」『現代言語学』東京：三省堂，71-83頁。

⁷ 有坂秀世に関わる興味深い言及があるため関連部分を引く。「二等韻に介母を仮定するに当たって啓発された直接の論文として、有坂秀世博士の前引論文「カールグレン氏の拗音説を評す」及び「先秦音の研究と拗音的要素の問題」（前引書「国語音韻史の研究」所収，pp.365-368）がある。博士は「古代支那語の拗音的要素に存在した \dot{i} と \ddot{i} との区別は、先秦時代の古音を研究するためにも、重大な意義を持つものである」点を示し、歯音の四等字と二等字との間の相違は韻母ではなく「専ら拗音的要素（引用者註： \dot{i} と \ddot{i} ）の上に存した」とお考えになり、「その拗音的要素が、一面では（引用者註： \dot{i} は）その頭音に、他面では（引用者註： \ddot{i} は）その中心母音に影響を与へた」（例：s \dot{i} ʌŋ > s \ddot{i} eŋ, s \dot{i} ʌŋ > s \dot{i} ʌŋ）とする説を提唱された。その細部については博士と解釈を異にする点のあるものの、等韻（ここでは歯音二・四等）間の別を主母音にではなく介母に認められた点は筆者も従うところである。なお、介母として*rを選んだのは李方桂教授の示唆、藤堂明保博士の所論（前引書 p.308 など）に啓発される点のあったことによる。藤堂博士は、二等韻に舌上音、歯上音の如き「そり舌音が集中的に現われたのは、かような韻母（引用者註：弛み母音，弛唇，半広半狭）の性質からして「寄生的な r」を派生したからではあるまいか」とお考えになるが、筆者は「寄生的な r」を介母として上古音の体系内に仮設する。」（76頁の注16）

⁸ 「中古音系に於ける舌上音の音価に関しては、それを硬口蓋音（palatal）とする説と、そり舌音（retroflex）とする説に分かれ、その何れかの問題の解決は将来の研究に待たねばならないが、本稿では便宜上 t-, ... と表記する。H. Maspero: Le dialect de Tch'ang-ngan sous les T'ang（唐代長安方言考）BEFEO 20-2,1920, 影印本 1931；羅常培：「知徹澄娘音值考」（歴史語言研究所集刊 3-1,1931），「唐五代西北方音」（歴史語言研究所単刊甲種之十二，1933, 影印本 1963）等を参照。」（74頁の注12）。「なお、舌上音の中古音系に於ける音価に関しては、大略二説あることは前に触れたが（脚註12），この *tr-...等はその問題には直接関与するも

中村：そうすると、介音でありさえすれば何でも良いということになりはしませんか。藤堂氏は中古のそり舌音の発生を説明するためにそり舌要素として-rを設定した。李方桂氏は中古のそり舌音の発生と母音の単純化のためにr介音を設定した。両者にはrとする理由があるが、大島氏のr介音にはrでなければならない理由がない。大島氏のr介音が理論的な産物で記号に過ぎないとしても、1や2などの数字でない限り、rという記号は習慣的に一定の音声を想起させます。ですからこの記号を採用した理由の説明が必要です。r介音からそり舌音もしくは硬口蓋音が生ずるということですが、rの調音と舌面が口蓋に付く硬口蓋音の調音とは相容れないのではないのでしょうか。もっとも、羅常培氏のそり舌説に簡単にはくみしないという慎重な姿勢は賛成ですが。

吉池：藤堂氏のrそり舌成分説と李方桂氏のr介音説もrの音声としての実体を考えたならば違いがあります。藤堂氏がtr-なりtsr-なりとする場合、-r-を中古のt-やts-を説明するためのそり舌要素と説明します。これは理論的な記号のようなものと言うことができそうです。そり舌化を促進させる理論的な記号であるとする音声としての実体を具体的に説明する必要はありません。他方の李方桂氏のr介音は、1,3,4等韻字の来母(l-)と諧声系列をなすものです。ですから音声としての実体が必要です。上古音tr-,tsr->中古音t-,ts-とする場合の-rの音声実体がどのようなものか李方桂(1971)には説明がありません⁹。来母(l-)と諧声系列をなし、かつ声母をそり舌化するような音声とはどのようなものなのでしょうか。

中村：上古のr介音に李方桂氏がどのような具体的な音声を想定していたかは、r介音説が妥当であるとした場合に問題となります。まずは、r介音説が妥当であるかどうかを検討しましょう。そもそも李氏はなぜ中古2,3等の舌上音(知徹澄娘)をそり舌音としたかということです。

吉池：李方桂(1971;1982)は舌上音(知徹澄娘)をそり舌音とする理由を三つあげます。

1. 羅常培(1931)は、サンスクリットのそり舌音に漢語の舌上音を対応させる資料に拠り、漢語の舌上音(知徹澄娘)をそり舌音とした。
2. 歯音には、そり舌音声母(照₂穿₂床₂審₂等)と舌面音声母(照₃穿₃床₃審₃等)がある。歯音のそり舌音声母(照₂穿₂床₂審₂等)は2等韻と3等韻の前に出現することができる。舌上音(知徹澄娘)も同様に2等韻と3等韻の前に出現することができる。しかし

のではなく、硬口蓋音或はそり舌音の何れかに変化する前段階として仮定されるに過ぎない」(77頁)。

⁹ 喻母4等の声母としてのrについては「我們可以想像這個音應當很近似英文(美文也許更對點兒)ladder 或者 latter 中間的舌尖閃音(flapped d, 拼寫爲-dd- 或-tt- 的), 可以暫時以r來代表他, 」とする。(14頁)

齒音の舌面音声母（照₃穿₃床₃審₃等）の方は3等韻の前にのみ出現する。もしも知徹澄娘が舌面音であるならば、同じ舌面音である照₃穿₃床₃審₃等と、韻母との結合の仕方が同じになるはずであるが異なっている。このような結合の不一致を説明するのは困難である。

3. カールグレンは、上古の舌尖音（t等、ts等）が、後続する2等韻母の影響により、中古の知徹澄娘と照₂穿₂床₂審₂等になったとする。上古の舌尖音（t等、ts等）が2等韻母の影響を受けたとして、なぜ一方は舌面音の知徹澄等になり、一方はそり舌音の照₂穿₂床₂審₂等となるか、不一致が生ずる理由の説明が困難である。

4. 以上により、知徹澄娘をそり舌音として、そり舌音の照₂穿₂床₂審₂と対応させる。

知徹澄娘等母高本漢以爲是舌面前的塞音及鼻音 \hat{t} , \hat{th} -, \hat{d} -, \hat{n} -. 羅常培根據梵漢對音把這些聲母擬爲捲舌音 retroflex 或 supradental。就切韻音系の聲母分配情形來看，知徹澄娘等母跟照-穿-牀-審-等捲舌音很相似，都可以在二等韻母前出現，也可以在三等韻母前出現。但是舌面前的塞擦音照-穿-牀-審-日等母只能在三等韻母前出現。如果知徹澄等母是舌面前音的話，我們看不出來爲什麼跟同是舌面前的塞擦音的分配這樣的不一致。

再者，依高本漢的學說知徹澄娘跟照-穿-牀-審-都是從上古的舌尖前音，受二等韻母的影響變來的，我們也找不出適當的理由去解釋爲什麼二等韻母對於一種舌尖前音使他變成舌面前音如知徹澄等，對於另一種舌尖前音使他變成舌尖後音如照-穿-牀-審-等。這種不同的演變在音理上也不易說明。因此我們決定把知徹澄娘等母認爲是捲舌音，寫作 t -, th -, d -, n -, 以與照-穿-牀-審- ts -, tsh -, dz -, $ʃ$ - 相配合。（6-7 頁）

中村：2 と 3 は対応の均衡がとれないという指摘ですが、実際の言語には起こりうることでしょう。これは解釈の問題でもありますから説明は不可能ではありません。いっぽうの 1（羅常培 1931 の説）のほうは事実に基づいて提示されたものですから無視できませんね。

羅常培(1931)のそり舌音説

吉池：中古の 2,3 等の舌上音（知徹徵娘）はそり舌音であったとする羅常培(1931)の説はほぼ定説といってもいいくらいにみえます。中古でそり舌音が生じた理由を説明するために r 介音説が出てきたわけですから、もしも中古の舌上音がそり舌音（retroflex）でなく舌面音（palatal）であったならば、積極的に r 介音を設定する必要はなくなりますね。

中村：羅常培(1931)は、サンスクリットのそり舌音（retroflex）を、舌上音の漢字で音訳した事実により、中古の舌上音はそり舌音であったとするわけですが、これに対して平山久雄(2005)¹⁰は、羅常培氏の対音資料は漢語の舌上音がサンスクリットのそり舌音に近似して

¹⁰ 平山久雄(2005)「用声母腭化因素 *j 代替上古漢語的介音 *r 一對上古舌齒音聲母演變的一種設想」『平山久雄語言學論文集』北京：商務印書館，84-102 頁。

いたことを示すだけで、そり舌音 (retroflex) であったか舌面音 (palatal) を決定するものではないとします。

羅先生把知組擬爲卷舌塞音，其主要依據在于：從西晉開始的各種梵文字母的對音資料（特別是隋、唐、北宋時期的資料）中，用漢語的知組字對梵語的卷舌塞音 t, th, d, dh, n ；佛典中音譯專名時的情況也與此一致。羅先生據此推斷，從 6 世紀末至 11 世紀初，漢語的知、徹、澁三母也讀做卷舌音。依我看，對音的這種情況只能表示，知組在當時的漢語音系中音色最近似梵語的卷舌塞音；兩者的發音部位未必是一致的。即使知組是非卷舌的舌面前塞音，其聽覺的印象也應當和卷舌塞音接近，比如我們用舌面前部與齒齦之間成阻的 $[t]$ 來試發 $[ta]$ ^①，就會知道，在輔音除阻時發出的音色和卷舌的 $[ta]$ 充分相近^{補注¹}。因此我認爲知組的舌面音說可以和卷舌音說同樣地說明上述的對音情況。（85-86 頁）

吉池：羅常培氏の対音資料によって漢語舌上音（知徹微娘）がそり舌音 (retroflex) であったか舌面音 (palatal) を決定することはできないとの論はそのとおりだと思います。しかし根拠として、そり舌音 $[ta]$ と舌面音 $[ta]$ の音色の類似をあげる必要はあるのでしょうか。

中村：そり舌音 $[ta]$ と舌面音 $[ta]$ の音色の類似を強調するまでもないでしょう。サンスクリットに t $[t]$ と $ṭ$ $[ṭ]$ があり、漢語に t $[t]$ と舌上音 ($[t]$ or $[ṭ]$) があるとして、サンスクリットのそり舌音の $ṭ$ $[ṭ]$ に漢語を当てるばあい、舌上音がなんであろうと、舌上音を使うしかない。サンスクリットの話者には $[t]$ と $[ṭ]$ の音韻的な区別がないため、漢語の舌上音が $[t]$ であろうと $[ṭ]$ であろうと区別はつかない。また漢語の話者も同様に $[t]$ と $[ṭ]$ の音韻的な区別がないため、サンスクリットの $[ṭ]$ に舌上音 $[ṭ]$ (仮に $[ṭ]$ であるとして) を当てることに違和感はないはずです。このようなことではないでしょうか。

吉池：いずれにしても、平山久雄氏が指摘するように、サンスクリットと漢語の対音資料によって漢語の舌上音がそり舌音 (retroflex) であったか舌面音 (palatal) であったかを決定することはできないのが道理でしょう。羅常培(1931)を根拠として、そり舌音 (retroflex) 説が定説のように扱われるのは不思議でなりません。

もう一つのそり舌音説—Pulleyblank(1984)

中村：Baxter(1992)も中古の舌上音をそり舌音 (retroflex) とするわけですがその根拠は何でしょう。

吉池：Baxter 氏は、羅常培(1931)のサンスクリットと漢語の対音資料と、Pulleyblank (1984) のベトナム漢字音の両者により中古の舌上音をそり舌音 (retroflex) としますが、なんらかの論証をしているわけではありません。

Table 2.7. Middle Chinese retroflex stop initials

Baxter	Karlgren	Pulleyblank (EMC)
<i>tr-</i>	<i>í-</i>	<i>tr-</i> (<i>t-</i>)
<i>trh-</i>	<i>í'-</i>	<i>tr'</i> (<i>t'-</i>)
<i>dr-</i>	<i>d'í-</i>	<i>dr-</i> (<i>d-</i>)
<i>nr-</i>	<i>n'í-</i>	<i>nr-</i> (<i>n-</i>)

Karlgren reconstructed these initials as palatal stops, but it is more likely that they should be reconstructed as retroflex stops, as proposed by Luó Chángpéi (1931b), since they were regularly used to transcribe the retroflex stops of Sanskrit. As Pulleyblank observed (1984: 66), these initials are also represented as retroflex in Sino-Vietnamese, e.g. (pp. 49-50)

中村：Pulleyblank (1984)はベトナム漢字音についてどのようなことを言っているのでしょうか。

吉池：Pulleyblank(1984:66-67)によると、ベトナム漢字音にはそり舌音と舌面音の区別があり、中古の舌上音（知徹微）にはそり舌音を使うようです。このような事実は羅常培(1931)が提示したサンスクリットと漢語の対音資料よりも重要であるとしています。

Unlike the *zheng chi*（正齒音：対談者による）initials, the *sheshang*（舌上音：対談者による）initials derive from a single category as defined by the *fanqie* of the *Qieyun*, even though they are found in both Grade II and Grade III in the rhyme tables. Karlgren's decision to reconstruct them as palatal stops was based on aprioristic assumptions rather than any actual evidence. Since they are rather more common in Grade III than in Grade II and since, according to him, Grade III implied a medial j glide, he assumed that they must be palatal. As Luo Changpei (1931) showed, however, these initials are typically used to correspond to the Sanskrit retroflex series — *ṭ*, *ṭh*, *ḍ*, *ṇ* — in Buddhist transcriptions. A further important point, not noted by Karlgren or Luo, is that Sino-Vietnamese, which distinguishes clearly between palatals and retroflexives, consistently has retroflexives for the *sheshang* initials: 知 SV *tri*, and so on. As was shown in Pulleyblank 1962, the assumption that these initials were retroflexives, derived from Old Chinese -r- clusters (referred to as -l- clusters in that article), greatly simplifies the reconstruction of Old Chinese. Several scholars, including F. K. Li, have now come round to that point of view.

中村：舌上音の「知」がベトナム漢字音のクオック・ゲーの表記で「tri」となる（“知 SV *tri*”）ことはわかりますが、舌面音とそり舌音がどのように区別されたうえで、漢語の舌上音にそり舌音が使われるのか、具体的なことは何もわかりませんね。

吉池：そうですね、肝心なところが書かれていません。参考文献にある Maspero (1912)の『ベトナム語音韻史』¹¹もしくは三根谷徹(1972)『越南漢字音の研究』(三根谷徹(1993)『中古漢語と越南漢字音』所収¹²。以下、三根谷徹(1993)として提示する)を参照しろということなのでしょうが、Maspero (1912)は荷が重いので、ここでは三根谷徹(1993)をのぞいてみることにします。なお三根谷徹(1993)は Maspero (1912)を主要な参考文献としています。三根谷徹(1993)の最後に付された「越南漢字音對照表」は五種の資料にみえるクオック・グーをまとめたものですが、そのなかから『越南字典』(Hanoi, 1931)¹³の語例の一部をあげます。この字典は古典を読むためにその出典を古典にもとめたもので、漢語・漢字音に関して最も信頼することができるということです。なお、声母のみ記し、韻母は省略し、韻は平声で代表させます。

	陽韻	鐘韻	魚韻	尤韻	脂韻	之韻	真韻
知	張 tr-	冢 tr-	著 tr-	晝 tr-	致 tr-	置 tr-	珍 tr-
徹	暢 s-	寵 s-		抽 tr-, 丑 s-		痴 s-	
澄	長 tr-	重 tr-	除 tr-	稠 tr-	遲 tr-	持 tr-	陳 tr-
照 ₂	莊 tr-		阻 tr-			輜 tr-	
穿 ₂	瘡 s-		楚 s-			廁 x-	
牀 ₂	狀 tr-		助 tr-	愁 s-		仕 s-	
照 ₃	章 ch-	鍾 ch-	諸 ch-	周 ch-	脂 ch-	之 ch-	眞 ch-
穿 ₃	昌 x-	衝 x-	處 x-	醜 x-		齒 x-	嗔 s-
牀 ₃		贖 th-			示 th-		神 th-

17 世紀のクオック・グー (ベトナム語を表記するローマ字) で表記したものをとおして 10 世紀ころの成立とされるベトナムの漢字音を推測するということになります。

中村：これらのクオック・グーは現代のベトナム語でどのように発音されるのでしょうか。

吉池：三根谷徹(1993)によるとつぎのとおりです。

ハノイ方言 トンキン地方 (北部) サイゴン方言 Vinh 方言

¹¹ Maspero, H. (1912) Études sur la phonétique historique de la langue annamite. Les initiales. BEFEO t. VII.

¹² 三根谷徹(1993)『中古漢語と越南漢字音』汲古書院所収の、三根谷徹(1972)『越南漢字音の研究』東洋文庫による。頁数も三根谷徹(1993)による。

¹³ Hội Khai-trí-tiến-đức (1931) *Việt-Nam-Tự-Điển*. Hanoi.

tr-	c	ɾ	tʂ	tʃ
s-	s	ʂ	ʂ	
ch-	c	tʂ	c, tʃ	c
x-	s	s	s	
th-	無記	tʰ	無記	

*ハノイ方言は三根谷徹(1993:256)、トンキン方言は三根谷徹(1993:256)が Lê Văn Ly (1948)¹⁴から引用したもの、サイゴン方言は三根谷徹(1993:258,298)による。サイゴン方言の ch-につき、258 頁には硬口蓋破裂音[c]とあり、298 頁には後部歯茎破裂音[tʃ]とある。ともに舌面音ではあるが調音の位置が異なる。あるいは一方は誤記であるかもしれないが確認が必要である。Vinh 方言(「北部方言に属するがハノイ方言とすこしちがう」とある)は三根谷徹(1993:256)が Emeneau(1951)¹⁵から引用したもの。頭子音の音素のリスト/t, c, k, b, d, tʃ, tʰ, kʰ, m, n, ɲ, ŋ, f, v, ɣ, s, z, ʂ, ʐ, l, h/を提示するがクオック・グーとの対応は示さない。/tʃ/は tr-に、/c/は ch-に対応するものと想定し対談者が表に収めた。

中村：ハノイ方言は tr-と ch-、s-と x-が合流しており参考になりませんが、トンキン方言とサイゴン方言はそれぞれ区別がありますね。これによると、tr-のトンキン方言は接近音 ɾ、サイゴン方言はそり舌破擦音 tʂ。ch-のトンキン方言は硬口蓋破擦音 tʂ、サイゴン方言は硬口蓋破裂音 c もしくは後部歯茎音 tʃ。これによると音質としては、tr-はそり舌音の系統、ch-は舌面音の系統ということになりそうですね。

問題はクオック・グーが作られた 17 世紀にどのような音を意図していたかということです。

吉池：その点については三根谷徹(1993:257)が Thompson(1965)¹⁶の説を紹介しています。これはクオック・グーがもと表わしたであろうと推定される子音の体系です。音はクオック・グーのみで示してあるので、勝手ながら必要なものについて () で括り音声を提示してみました。

	Labial	Dental	Alveolar	Laminal	Dorsal	Glottal
Voiceless stop	p	t	tr (tʂ)	ch (c)	k	ʔ
Voiceless Aspirated	ph	th (tʰ)	s (ʂ)	x(ç)	kh	h
Stops and Spirants						
Voiced stops	b	d	ḍ	gi		
Voiced Oral continuants	v	l	r		g	
Nasals	m	n		nh	ng	

¹⁴ Lê Văn Ly (1948) *Le parler vietnamien. Essai d'une grammaire vietnamienne*. Paris.

¹⁵ Emeneau, M. B. (1951) *Studies in Vietnamese Grammar*. University of California Press 1951 University of California publications in linguistics, v. 8.

¹⁶ Thompson(1965) *A Vietnamese Grammar*. University of Washington Press.

この表の説明に「tr と ch は、後者が今日のそれと同様であつたのに、tr は retroflex であり、secondary articulation として spirant を伴う。そしてその位置の spirant が s で書かれ x と區別されるのである。」とあることから、tr はそり舌音の ʈ に摩擦音の ʂ が寄生した ʈʂ であり、ch は硬口蓋破裂音の c であったとしてよいのでしょう。無声の気音 (Voiceless Aspirated) を伴った破裂音と摩擦音 (Stops and Spirants) の段の音声ですが、歯部 (Dental) の無声破裂音 th は気音を伴った破裂音 tʰ として問題はないでしょう。歯茎部 (Alveolar) の無声摩擦音 s は上の説明文に「そしてその位置の spirant が s で書かれ」とあるので、そり舌音の ʂ としました。硬口蓋の摩擦音 x は ç としました。

中村：この再構成音を信ずるならば、クオック・グーが表した 17 世紀のベトナム語にはそり舌の無声破裂音 (やや摩擦を伴う) ʈʂ と、舌面の無声破裂音 c があつた。そして、漢語の歯音 2 等と舌音 2,3 等にそり舌音の ʈʂ を当て、歯音 3 等には舌面音の c を当てたということになりますね。

吉池：別の角度からみれば。17 世紀まで引き継がれてきた歯音 2 等と舌音 2,3 等の漢字音は ʈʂ であり、歯音 3 等の漢字音は c であったとも言えます。Pulleyblank(1984:66-67)は “Sino-Vietnamese, which distinguishes clearly between palatals and retroflexives” というだけで、そり舌音と舌面音の明確な区別が何を指すか明らかではありません。しかし、参考文献リストに三根谷徹(1972)や Thompson(1965)を挙げていることからみて、あるいは、ʈʂ と c のような区別を意図した発言であるかもしれません。問題はこのような 17 世紀の状況からベトナム漢字音が成立した 10 世紀の漢語音の状況を想定するしかないのですが、三根谷徹(1993:301,313,315)は tr- と ch- と th- に相当する 10 世紀のベトナム語音を次のように推定しています。

tr- : ʈʂ- と tʂ の可能性があるが、tʂ の方が可能性は大きい。(301 頁)

ch- : c とする。(313 頁)

th- : tsʰ とする。(315 頁)

中村：10 世紀頃の漢語音と 10 世紀ベトナム語音の三根谷徹(1993)の推定音を対応させるとどうなりますか。

吉池：中古音の音価をどのように推定するか研究者により異なります。I は Karlgren(1915-26)、II は陸志韋(1940)¹⁷です。なお II は三根谷徹(1993:267-269)に引用されています。III は李方桂(1971;1982)・Pulleyblank(1984)・Baxter(1992)です。

漢語音

ベトナム語音

¹⁷ 陸志韋(1940)「試擬切韻聲母之音值，並論唐代長安語之聲母」『燕京學報』28、pp. 41-56。

I	舌音 2,3 等・舌面の破裂音	t	←tʂ
	歯音 2 等・そり舌の破擦音	tʂ	←tʂ
	歯音 3 等・舌面の破擦音	tɕ	←c
II	舌音 2,3 等・口蓋化した破裂音	t̚	←tʂ
	歯音 2 等・舌面の破擦音	tʂ	←tʂ
	歯音 3 等・舌面の破擦音	tɕ	←c
III	舌音 2,3 等・そり舌の破裂音	t̚	←tʂ
	歯音 2 等・そり舌の破擦音	tʂ[tʂ]	←tʂ
	歯音 3 等・舌面の破擦音	tʂ[tɕ]	←c

中村：ベトナム語話者が、そり舌音と舌面音を区別したとすると III は無理がなく、I にはやや無理があるというところでしょうか。

吉池：II についてはどうでしょう。そり舌音はなく、すべて舌面的なものであったと推定するわけですが。

中村：口蓋化した t̚ の調音位置を、tʂ と同様に歯茎後部としてよいならば¹⁸、歯茎後部 (t̚ と tʂ) と硬口蓋 (tɕ) —調音位置の前後— によって作られる音によって区別し、歯茎後部の

¹⁸ 陸志韋氏は、先行の Karlgren(1915-26)や羅常培(1931)において t 等の記号が使用されていることを知っていたはずであるが、陸志韋(1940:55)では t̚ 等を使用した。その意図は陸志韋(1940:55)の「切韻聲母表」の配列に現れている。t̚ 等と tʂ 等を同じ列に配し、tɕ 等とは列を異にする。この配置により、t̚ 等は tʂ 等の調音位置と同じであり、tɕ 等の調音位置とは異なるとしていることがわかる。なお、この記号を音声学の面から確認するならば次のようである。

服部四郎(1984;1987)『音声学』(岩波書店、第3刷1987年による)に「§3 口蓋化 第二調音として、前舌面が硬口蓋に向って[j][i]の場合のように、あるいはそれに近くもち上ること。国際音声字母では[t̚][d̚][n̚][s̚]のように鉤印で口蓋化を表わすか、口蓋化子音と非口蓋化子音と両方を有する言語の口蓋化子音を表わすには[t̚j][d̚j][n̚j][s̚j]のように[j]を添える。また[z̚] (= [z̥]) のように[̚]で口蓋化を表わす。音韻として、非口蓋化の[t̚][z̚]から区別されている口蓋化された[t̚j][z̚j]を表わすためには、特別の記号[t̚j̚][z̚j̚]を用いることがある。

両唇音や唇歯音の口蓋化においては第一調音はほとんど変化しないが、口角が左右へ引かれる傾きがある。

舌尖が歯茎の前部に対して調音する[t̚][d̚][n̚]も、第一調音をほとんど変化せずに口蓋化することは不可能ではない。しかし、実在する口蓋化歯音[t̚j̚][d̚j̚][n̚j̚]というのは、舌端または前舌面前部または両方で閉鎖の形作られることが多い。ロシア語の[t̚j̚][d̚j̚][n̚j̚]も舌端と歯茎(ANf)との間で閉鎖の形作られるのが普通のようなものである。」(109-110頁)とある。

国際音声学編 竹林滋・神山孝夫訳(2003)『国際音声記号ガイドブック—国際音声学協会案内—』(大修館書店)に「t̚ 硬口蓋化 無声 歯あるいは歯茎 破裂音 廃止 (1989)」(232頁)とある。

音にはベトナム語の *ts* をあて、硬口蓋の音にはベトナム語の *c* をあてたということになりますね。別の言い方をすれば、ベトナム語話者は、まず漢語の硬口蓋音の *tc* にベトナム語音の硬口蓋音の *c* をあて、ついで残りの *t* と *ʃ* に調音位置が比較的前部であるベトナム語の *ts* をあてたということでしょうか。

吉池：調音位置の前後による音の差異によったとしたならば、Ⅲだけではなく、ⅠにもⅡにもあてはまるかもしれません。いずれにしても、ベトナム漢字音の資料は、漢語中古音と10世紀ベトナム語音をどのように解釈するかにより利用価値が異なってくるので、漢語中古音の舌音2,3等をそり舌音とするか舌面音とするかについて、決定打とはならないように思います。

中村：ところで、舌音2,3等を舌面音とする陸志韋(1940)の論拠はなんでしょうか。

吉池：陸志韋(1940:50)は理由として三点あげます¹⁹。

1. サンスクリットのそり舌音 *t* 等の音訳漢字として「{口毛}」「咤」など奇妙な字を使用したり、「咻」や「{口茶}」など口篇を付して作字して使用したりする。これは *t* 等に相当する字がなかったため。
2. 僧迦婆羅訳「文殊師利問經字母品」に「輕多」「輕他」「輕那」など「輕」を付してそり舌音 *t* 等を音訳する。これは6世紀初めに *t* 等に相当する字がなかったため。
3. サンスクリットのそり舌音 *t* 等を来母字で音訳するものがある。これは漢語にそり舌破裂音がなかったため。

これらは舌面音説を側面から支持するおもしろい資料ですが決定打とは言い難いですね。

¹⁹ 所可疑者，知徹澄三母之二等字儘多通用者，苟其爲捲舌，譯者何以多用‘{口毛}咤’等怪字，甚或造作‘咻{口茶}’等‘口’旁字，此其一。譯者中亦有不以‘{口毛}’等當‘*t*’等者。僧迦婆羅譯文殊師利問經字母品（大正藏，四六八種，第十四冊498頁），尚用‘輕多輕他・・・輕那’，時已在六世紀之初（513），故疑當時‘*t*’等字在漢語並無切當之譯音，此其二。最無可說者，譯音何以有時以來母字當‘*t*’‘*d*’也。舉余所知，則有

究羅瞋摩羅	Kuṭasalmali
僧伽梨	Samghaṭi
舍勒	Śaṭaka
俱俱羅	Kukkuṭa
首羅	Cūḍa
周利槃陀迦	Cūḍapanthaka
陀毘羅	Drāviḍa
迦樓羅	Garuḍa
吠瑠{王利}耶	Vaiḍūrya
拘隣 居輪	Kauṇḍinya

說來母字時，舌頭抵上齒或齒齦之間，意者漢魏以來已如此矣。故以當梵音捲舌之勢，反以爲破裂音之不重要。當時並無捲舌之破裂音概可知矣，此其三。

舌面音説 —陸志韋(1947)

中村：舌音 2,3 等を舌面音とすることについて、陸志韋(1947)²⁰に興味深い議論があります。これは同様に舌面音説をとる平山久雄(2005)が引用し解説をくわえていますので、平山久雄(2005)とともに言及したほうがいいのかもかもしれませんが、切り離して先に検討しましょう。

吉池：陸志韋(1947)と平山氏の解説を合わせ読んだのですが²¹、こういうことでしょうか。

	古官話（中原音韻）	明代	現代
中古支脂之韻以外の章組と知組	tc-		
中古支脂之韻の章組	支思韻 tʂʅ	tʂʅ	tʂʅ
中古支脂之韻の知組	齊微韻 tci	tci	tʂʅ

古官話（『中原音韻』）でふつうには章組と知組は同音の tc-となっている。しかし、中古音で支脂之韻であったものについては、声母の違いによって古官話（『中原音韻』）の所属韻部が異なる。章組は支思韻（弛んだ中舌的な主母音 i を持つ）に所属するからそり舌音声母の tʂʅ のような音であり、知組は齊微韻（緊張した前舌主母音 i を持つ）に所属するから舌面音の tci のような音であった。その状況は明代まで続いており、知組がそり舌音となったのは、たかだか 300 年程度の歴史しかないということですね。

中村：齊微韻の主母音は舌位が高い i であるから声母は舌面音であったとすることができます。そうすると、中古音でそり舌音の tʂʅ であったものが、古官話（『中原音韻』）で舌面音の tci となり、その後、現代までにそり舌音の tʂʅ となるとすると不自然で複雑な変化となります。それに対して、中古音で舌面音であったとすると、それが古官話（『中原音韻』）で舌面音の破擦音になり、現代までにそり舌音の破擦音となったとすると音の変化としては自然な推移となります。

²⁰ 陸志韋(1947)「古音説略」『燕京學報』專號之二十。『陸志韋語言學著作集（一）』北京：中華書局，1915 年所収による。

²¹ 陸志韋（1947:13—15 頁）也主張知組舌面腭化音説，作為其論據之一，陸先生提到下面一個事實（14 頁）：

古官話把支脂之韻系的照開口字歸入支思韻，它的音值已經近乎今音的 tʂʅ，惟獨知開口永遠不卷舌化。直到《西儒耳目資》《五方元音》，照跟知分別得十分清楚。那時候的知又清清楚楚的是 tci，不是 tʂʅ，更不是 tʂi。知的卷舌化至多只能有三百年的歷史。

讓我解釋一下這段話的意思。中古的知組在古官話即《中原音韻》的音系中一般與章組合併，音值可擬為 tc 等，只有止攝開口知組與章組不同音，知組字屬於齊微韻，其音值當為 tci 等，章組字則屬支思韻，而與莊組字同音，當為 tʂʅ 等。要是採用知組舌面音説，這情況是不難理解的：章組 tci 等變成了 tʂʅ 等，與莊組合併以後，知組字從 tci 變到了 tʂʅ，來填補章組字卷舌化後的空缺。如果止攝開口知組的中古音是 tʂʅ 等的話，它在古官話裏就算是變成了平舌的塞擦音 tci 等，然後到現代官話再變回到卷舌的 tʂʅ 等，這是何等的迂曲和累贅。我認為陸先生這一看法是令人首肯的。（以上、平山久雄 2005 の 90 頁より）

吉池：陸志韋氏の議論、わたしには舌音 2,3 等を舌面音とする有力な議論のように映ります。しかし、中古音の時代から遠くだった『中原音韻』(1324 年)の資料により中古音にさかのぼって推測をしているわけですね、中古音当時の資料が欲しいところです。

舌面音説—平山久雄(2005)

中村：その点については平山久雄(2005)があります。平山久雄氏は反切下字の声母の分布の偏りにより舌面音 (palatal) であったとします。

吉池：反切は、東を徳紅切とするように漢字二字 (徳紅) をもちいて東の音を表わすものですね。徳を“反切上字”または単に“上字”、紅を“反切下字”または単に“下字”、東を“帰字”と呼ぶ。ふつう、反切上字で帰字の声母を表わし、反切下字で帰字の韻母を表わすはずですが、そもそもどうして反切下字の声母を問題とすることができるのでしょうか。

中村：平山氏の想定では、[t] や [te] のような舌面音の後に続く -i-介音は狭い (舌位の高い) 音で、そのような介音は原則として反切下字で表されるため、もしも舌上音の帰字に対して狭い -i-介音を持つ反切下字が多く用いられていれば、舌上音はそり舌音ではなく舌面音と見なされる、ということのようです。平山氏は類相関の研究でも有名ですから、舌上音の音価の検討もその延長上にあると言ってよいかも知れません。

吉池：類相関というのは反切上字と帰字の関係のことですね。

中村：はい。重紐²²の A 類と B 類、そして重紐の対立を持たない C 類について、上字と帰字に次のような関係があるというものです。

上字 \ 帰字	A 類	B 類	C 類
A 類	○	×	×
B 類	×	○	×
C 類	○	○	○

A 類の反切上字は A 類の帰字にしか用いられず、B 類の上字は B 類の帰字にしか用いられないという偏りがあります。平山氏はこの関係を中古音の音価推定にも利用しました²³。平山久雄(2005)において舌上音がそり舌音ではないと主張する根拠も主に反切用字の偏りを利用したものです。

²² 例えば、『広韻』の平声支韻の「奇 (渠羈切)」と「祇 (巨支切)」はどの方言でも同音であり、まるで同音の音節が二重に登録されているように見えるため、これを「重複した小韻」の意味で重紐という。このようなペアは『韻鏡』などの韻図では一方が 3 等にもう一方が 4 等に配される。前者を B 類、後者を A 類という習慣になっている。

²³ 平山久雄(1966)「切韻における蒸職韻と之韻の音価」『東洋学報』49(1)など。

吉池：なるほど。それで平山久雄(2005)をわたしも読んでみました。ポイントとなる反切の部分についていま一つ肚に落ちない部分があるのですが概略としてまとめるとつぎのようになるのでしょうか。表を引用します。唇牙喉音に重紐がある 34 等複韻の帰字の声母と反切下字の声母の関係を調査したものです。表中の数字は実数ではなく百分率で、調査の対象は上田正(1975)の『切韻』の反切です。原文に「被切字聲組」とあったところは“帰字声組”としました。

下字声組 帰字声組	幫 A	見 A	章	精	知	来	莊	幫 B	見 B	計 (例数)
幫 A	<u>22</u>	6	<u>37</u>	10	1	18			4	100 (67)
見 A	6	<u>20</u>	<u>57</u>	10	2	5				100 (82)
章		3	<u>73</u>	6	3	11			4	100 (228)
精	1	2	41	34	4	13			4	100 (167)
知			<u>36</u>	8	15	<u>33</u>			<u>8</u>	100 (105)
来		3	<u>44</u>	15	18				<u>21</u>	100 (39)
莊		2	<u>10</u>	2	6	<u>24</u>	18	2	<u>36</u>	100 (50)
幫 B		2	2		2	8	2	48	38	100 (63)
見 B			4	2	7	15		9	63	100 (182)

*数字に付した下線は本稿対談者による。

1. 帰字幫 A 組の下字は、同類の幫 A 組と、章組が多い。帰字見 A 組の下字は、同類の見 A 組と、章組が多い。これは、章組 *tc-* が、幫 A 組 *pj* と見 A 組 *kj* と同様に口蓋化しており前舌の介音 [i] を持った A 類字であることを示す。

從表中可以看到，幫 A 組、見 A 組除了用同組的下字用得較多以外，章組下字用得最多。這可以解釋為：章組 *tc-* 等和幫 A 組 *pj* 等、見 A 組 *kj* ①等一樣都帶有腭化色彩；在腭化的影響之下，章組字的介音②也同樣是前舌性很強的 [i]，連主要元音也同樣地偏前，偏窄，因而用章組字較適於切幫 A 組字、見 A 組字。若論其韻母的音色，章組字明顯地站在重紐 A 類字這一邊。（87 頁）

2. 帰字章組の下字は、大多数が同類の章組。それに対して、帰字莊組の下字は、章組は少なく、見 B 組が多い。これは莊組が、そり舌音のため非口蓋化声母である B 類声母と類似していたことを示す。

章組被切字大多用章組下字，很少用 A 類下字，不過是因為 A 類字除了切 A 類字以外一般很少用作下字的緣故。莊組則與章組相反，明顯地屬於重紐 B 類這一邊：莊組被切字少用章組下字，而是用見 B 組下字用得最多，其介音、主要元音應當與 B 類字相近。這是很自然的，因為莊組的卷舌成分會使介音多少偏央，近似 [ɨ] 或 [ɪ]，也會使主要元音偏央、偏寬；這

種音色應當是和 B 類的非腭化聲母給韻母帶來的語音特徵相近。 (87-88 頁)

3. 歸字知組の下字は、章組と来母が多く少数ながら見 B 組もあり、章組と莊組の中間の様相を呈する。歸字来母の下字は、章組と莊母が多く、A 類字と B 類字の中間である。

表中還可以看到，知組的情況介乎章組與莊組之間：知組被切字較多採用章組下字，同時也採用一些見 B 組下字，此外來母下字也用得較多；而來母作為被切字除了常採用章組下字以外則較多採用見 B 組下字，作為下字則切 A 類字和切 B 類字的比率幾乎一樣多，由此可以看出來母具有中間狀態的性質。 (88 頁)

4. 歸字知組の下字が口蓋的な章組と非口蓋的な莊組の中間の様相を呈するのは、知組が破擦音化するのを防ぐため後続する介音が A 類字にくらべてやや緩んでいたためである。もしも知組の音価がそり舌音の莊組と同様であったならば、B 類の性質（下字について、見 B 組の比率が高くなり、章組の比率が低くなる）を持つはずであるがそのようにはなっていない。

如果知組の音値是卷舌塞音，那麼被切字和下字的搭配上知組應該與莊組一樣地顯示出近似重紐 B 類的性質。但事實並非如此。我認為這是對知組卷舌音說的一個有力的反證。有人會問，知組果真是舌面塞音，那為什麼它不和章組一樣表示近似 A 類的性質？這個問題是不難回答的：要是知組聲母後的介音像 A 類字裡那樣是舌位很高的 [i]，那麼聲母除阻後會帶上擦音的音色，這樣就容易和章組混淆了。為避免這種塞擦音化，知組後面介音的舌位不能很高。來母後的介音也一樣，是因為 [i] 和 [ɿ] 構音方式有所矛盾：[i] 要求氣流從舌頭的正中流出，兩邊要封閉，[ɿ] 則需要氣流從舌頭的兩邊流出，正中要封閉^①。因此 [ɿ] 後的介音舌位多少要偏低，以便從 [ɿ] 容易過渡。 (88-89 頁)

中村：要するに、平山氏の主張では、知組の介音は、章組 tc のような狭い介音 [i] ではなく、破擦音化を防ぐためにやや緩んだ介音であった。そのため章組と莊組の中間の様相を呈する。しかしながら、知組の下字声母は、そり舌音莊組 $tʂ$ の下字声母の分布とはあきらかに異なる。これは知組がそり舌音であったとする説の反証なるということでしょう。

吉池：表をみると、歸字莊組の下字に見 B 組が 36、歸字知組の下字に見 B 組が 8 と明らかに差があり、両者は異なるということはわかります。しかし、歸字莊組の下字に来母が 24、歸字知組の下字に来母が 33 というのはどうなのでしょう。来母は全体によく使われていますが、知組の 33 は一番で、莊組の 24 は二番でありこの点では両者は似ています。知組の 33 を、破擦音化を防ぐためやや緩んだ介音を持っていたことに帰してよいものかどうか、いま一つ肚にストーンと落ちません。

中村：そもそも知組が破擦音ではないことを根拠に介音がやや緩んでいたという説明が有

効かどうか疑問です。知組は唐代以降になると結局は破擦音化するわけですから、むしろ非常に狭い介音を持っていたと考える方が理にかなっています。上の表の状況と、陸志韋氏の指摘した、後に破擦音化して章組と合流するという事実をもって、知組がそり舌音ではなかったという結論は認めてよいのではないのでしょうか。

吉池：つまり、平山氏の論証には過程の細部に疑問はあるけれども、結論としては舌上音（知組声母）を舌面音と考えるのが妥当だということですね。知組には2等韻と3等韻があるわけですが、この表は3,4等韻の反切をまとめたもので、直接には2等の知組は関わりません。しかし、2等韻の知組帰字の上字に3等韻知組を使用していることから両者は同一の声母と見なされますので、いま問題としている2等の知組は舌面音であった可能性が高いということになりますね。

いま一つの舌面音説

吉池：ところで中村さん、以前、知組は重紐 A 類だという論文を書きませんでしたか。A 類であるということは、知組は舌面音であったということを指しているわけですね。

中村：もう30年近く前に書いた論文²⁴ですが、そこでは知組が舌面音であったかどうかということは全く論点にしていませんでした。ただし、知組がA類相当であるという結論からは当然、その声母もそり舌音ではなく舌面音と考えざるを得ません。

吉池：知組がA類相当というのはどういうことですか。

中村：重紐の音韻論的な解釈としては、A類/kj-/、B類/k-/のように口蓋化声母と非口蓋化声母の対立に帰する三根谷徹（1953）²⁵の解釈があり、平山氏もそれに従っています。これは知組（および来母）がA類とB類の双方の反切下字として用いられるため、重紐の対立を介音に帰した場合、知組の帰属が決定できないことからの措置でした。

吉池：平山氏の表現を借りれば「中間状态的性質」ですね。その知組を中村さんはA類相当と判断したのですか。

中村：まず、前段階として重紐の音韻論的解釈を声母ではなく介音に帰するべきだというのが私の主張でした。それは、A類/kj-/、B類/k-/のように声母の対立とした場合、C類の反切上字をもつ例をうまく説明できないからです。C類の上字はA類の帰字にもB類の帰字

²⁴ 中村雅之(1992)「中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって」『富山大学人文学部紀要』18、89-104頁。

²⁵ 三根谷徹（1953）「韻鏡の三・四等について」『言語研究』22/23。

にも広く使われます。それで、もしも C 類を B 類と同様に /k-/ などの非口蓋化声母とした場合、それがどうして A 類の上字になれるのか説明が付きません。例えば、「企：去智反」の例でみると、A 類の「企 /k'j-/」に対して C 類の「去 /k'-/」が上字に使われていますが、声母が合いません。そうかといって C 類を /kj-/ などの口蓋化声母とすると、今度は B 類の帰字に対して C 類の上字を用いる例が説明できなくなります。

吉池：なるほど。『切韻』の反切を説明するのに、重紐の対立を声母に帰する三根谷説は不都合だということですね。

中村：はい。それで、有坂秀世・河野六郎の二氏が重紐の差異を介音に認めたように、音韻論的にも A 類 /-i-/、B 類 /-i-/ のように介音に対立を設ける方がよいと結論付けた訳です。

吉池：しかし、知組と来母は下字として A 類にも B 類にも用いられるわけですよ。平山氏のいう「中間状态的性質」ですが。どのようにして帰属を決めるのですか。

中村：平山氏は「中間状态的性質」を音価によるものと考えました。そのために、介音 /-i-/ の具体的な音声を考えるにあたって、中間的な段階を想定できるように、非常に狭いものから緩んだものまで 4 段階の音を想定する事態に陥りました。私は知組の中間的な性質は音価そのものにあるのではなくて、『切韻』編纂時に反切を吟味する際の口唱法（くしょうほう）に原因があると思っています。

吉池：口唱法ですか。

中村：反切というのは表音法的一种ですから、実際にそこから音を導き出さなければなりません。その際、声母を反切上字によって表し、韻母を下字によって表すのが原則なのですが、介音については上字で表すか、下字で表すかについて揺れがあります。もちろん上字と下字の介音が一致していることが最も望ましいのですが、『切韻』では必ずしもそうはなっていません。

吉池：具体例を示してもらえますか。

中村：例えば、次の例を見てください。

「毗：房脂反」（重紐 A 類）

「飢：居脂反」（重紐 B 類）

ともに反切上字が C 類で、反切下字が「脂」ですが、A 類と B 類の両方を導いています。「脂」は齒音 3 等字ですから、その介音は重紐 A 類相当の狭い /-i-/ です。したがって、A 類

を導く場合にはその/i-/が口唱においても有効になります。しかし、B類を導く場合にはその狭い介音/i-/は無視されて、上字「居」の緩んだ介音/i-/の方を採用したと考えざるを得ません。『切韻』の反切においては、口唱の際に上字の介音を取るか、下字の介音を取るかで揺れがあったことになります。

吉池：どうして上字と下字の介音をきちんと揃えなかったのでしょうか。

中村：『切韻』の時代にはすでに多くの方言で重紐の区別をしていなかったようです。そのことは『切韻』編纂で中心的な役割を果たした顔氏推が『顔氏家訓』「音辞篇」で述べています。『切韻』編纂に用いた前代の韻書の反切にも相当数、重紐の混乱が見られたはずですが、その際、それらの全てを訂正するのはかなりの手間ですから、何度か口で唱えてみて、どうにか正しい発音が導けそうなものはあえて訂正せずに残したのでしょう。「C類（上字）+B類（下字）→A類（帰字）」のようにどうしても不都合なものに限って、「C類+A類→A類」や「A類+A類→A類」に訂正した訳です。

吉池：なるほど。では本題にもどりますが、舌上音3等と来母3等が重紐A類相当の狭い/i-/介音をもっていたということでしたね。

中村：はい。理屈は単純で、「C類（上字）+舌上音3等（下字）」あるいは「C類（上字）+来母3等（下字）」がA類とB類の両方を導くという状況が『切韻』にはあるのですから、そのような状況が生じるためには上字と下字の介音が異なっている必要があります。したがってC類の介音を緩んだ/i-/と想定する限り、舌上音3等と来母3等の介音は狭い/i-/でなければなりません。

吉池：そして舌上音3等すなわち知組3等が狭い介音/i-/をもっているからには、その声母はそり舌ではなく舌面音である蓋然性が高いというわけですね。

中村：そういうことです。

李方桂のr介音説の評価

吉池：羅常培(1931)のサンスクリットと漢語音の対音資料や、ベトナム漢字音の資料は、漢語中古音の舌音2,3等をそり舌音とする説にとって決定打とはならず、舌面音説もそり舌音説も可能であることを確認しました。

中村：それにたいして、『中原音韻』の支思韻章組の字と齊微韻知組によって、中古の知組が舌面音であったと推定する陸志偉(1947)の知組舌面音説は、音韻の変遷を無理なく説明す

ることができて、なかなか説得力のあるものでした。

吉池：しかしそれは同時代資料によるものではありません。『切韻』の反切はほぼ同時代のもので、中古音研究において最も重視すべきものです。その反切下字と帰字の分布により知組は舌面音であったとする平山久雄(2005)の説、及び反切上字と反切下字のいずれかによって帰字の類別(A類、B類)を表すことができるという観点から知組は舌面音であったとする中村雅之(1992)の説によるならば、舌音 2,3 等すなわち知組は舌面音であったとしてよいのではないのでしょうか。

中村：李方桂氏の r 介音説は舌音 2,3 等がそり舌音であったことを前提としてたてられた説なので、舌音 2,3 等が舌面音であったとすると、r 介音説は主要な根拠を欠くこととなります。

吉池：李方桂氏は歯音 2 等がそり舌音 ts [tʂ] 等であったことも根拠にしますが、解釈によっては歯音 2 等は歯茎後部音 ʃ 等とすることも可能なので、この解釈をとるならばこの点においても r 介音説は根拠を失うこととなります。

中村：Jaxontov 氏は 1960 年の論文で上古音に二重子音 Cl-を想定し、第二成分の l が落ちて中古音の 2 等韻ができたとしたわけですが、李方桂(1971)は中古の舌音 2,3 等及び歯音 2 等をそり舌音であるとし、そり舌音の成立を説明するために、Jaxontov 氏が上古音に想定した -l-を-r-に替えました。しかし中古の舌音 2,3 等は舌面音であった可能性は高いわけですから、わざわざ Cr-とする必要はなく、Cl-のままでよいということになりますね。

吉池：最近の上古音研究のなかに、上古音に r 介音を想定し、中古の来母に相当する子音も r-とする再構成音をみかけます。しかし、2 等介音は-l-でよいとなれば、それと諧声系列をなす来母も l-でよいとして特段の不都合はありません。また、最近の上古音研究には喻母 4 等を l-とするものがありますが、来母が l-となれば、喻母 4 等に l-を想定することについて再検討しなければなりません。

今回はここまでとし、次回は 2 等韻および 3 等韻に Cl-を想定した場合何がおこるかということについて話し合しましょう。